ISSN 2758-7878

日本病院総合診療医学会雑誌

JAPANESE JOURNAL OF HOSPITAL GENERAL MEDICINE

2023年11月　第19巻　第6号

原　著

バセドウ病患者における腎機能の検討：eGFRを中心に …… 中村　重徳　390

研究短報

非都市部辺縁地域（医療過疎地）高齢者生活施設の特殊状態・病態症例受入れ状況の変遷 …… 森脇　義弘　399

症例報告

保存的治療で尿管狭窄が改善した尿管アミロイドーシスの1例 …… 米田　真也　403

ムカデ咬症後に発症したKounis症候群の1例 …… 野崎　哲　409

化膿性脊椎炎の治療中に両側膿胸を併発した1症例 …… 金澤　実　414

進行するふらつきにて診断された胃癌癌性髄膜炎の1例 …… 姉川　剛　421

COVID-19を併発した伝染性単核球症の1例 …… 中山　翔太　426

症例短報

電気痙攣療法により希死念慮を含む抑うつ症状が消退した抗うつ薬に反応不良な血管性うつ病の症例 …… 徃西　誠　431

髄膜炎を契機に診断に至った感染性心内膜炎の1例 …… 八板謙一郎　433

適切な治療により救命できた重篤な振戦せん妄の症例 …… 徃西　誠　436

LETTERS TO THE EDITOR

口腔内細菌による敗血症の予防 …… 五十野博基　439

周術期に口腔内細菌による敗血症で死亡した1例 …… 池谷　博　440

JOURNAL OF HOSPITAL GENERAL MEDICINE Volume 5 - 6 掲載論文

Platysma bands are associated with laryngeal penetration in older adults with suspected dysphagia …… Kanata Tonosaki　441

Clinically significant complications of sample collection for severe acute respiratory syndrome coronavirus 2 testing using nasopharyngeal swabs in Japan …… Makoto Hibino　442

A case of perforated duodenal ulcer after SARS-CoV-2 infection …… Mineto Ohta　443

Campylobacter enteritis with bacteremia mimicking meningitis …… Yuta Yoshino　444

Spontaneous Common Carotid Artery Dissection in a patient with the Bovine Aortic Arch Variant …… Kiyoshi Takemoto　445

Sclerosing tenosynovitis in systemic sclerosis;skin pigmentation and flexion contracture of a finger …… Shiro Ono　446

Biceps tendon rupture:Popeye sign with subcutaneous bleeding …… Shinji Higuchi　447

日本病院総合診療医学会

JAPANESE SOCIETY OF HOSPITAL GENERAL MEDICINE

巻　頭　言

日本病院総合診療医学会雑誌におけるダイバーシティへの考察

日本病院総合診療医学会雑誌　編集委員
群馬大学大学院医学系研究科　総合医療学　教授
小和瀬　桂子

日本のジェンダーギャップ指数は先進国の中でも最下位争いをしており，政府は2023年6月の男女共同参画会議において，「2030年までに女性管理職比率3割以上にする」目標を設けた。医学界においては，医師のうち女性の割合は1976年の9.4％から2018年の21.9％まで上昇を続けている（男女共同参画白書　令和2年版）。しかし，日本病院総合診療医学会雑誌（以下，本雑誌）における女性の筆頭著者は1割程度，責任著者においては1割未満であった。今回の巻頭言執筆を機会にいくつかの日本の医学系雑誌における筆頭著者と責任著者の女性割合を調べてみたが，本雑誌と同様であった。女性医師比率が2－3割という事を鑑みると，男性に比べて女性は学術雑誌に投稿しない傾向があることがうかがえる。

この理由としては，女性が出産育児のために仕事を一時中断せざるをえないという事だけではないであろう。なにがこの格差を生んでいるのか？女性医師が症例報告や原著論文，レビューなどを書く能力が低いとはとうてい思えないため，この格差の原因の分析が必要であると考える。

その一つの理由として，責任著者を担う女性医師の数の少なさが挙げられると思われる。日本の現状として，大学医学部において，講師，准教授，教授になるにつれ女性の割合は減少する。病院においては，医長，部長，副院長，院長になるにつれ割合が減少するのも同様である。そのため，若手に教育したり著書に責任をもったりする女性医師の割合が低い可能性は高いと推察される。

読者の中にはアンコンシャスバイアスという言葉を聞いたことがある方も多いであろう。誰しもが持つ「無意識の偏見・思い込み」である。もう一つの理由としては，この「無意識の」バイアスではないかと思われる。先日，全国の大学幹部を対象としたあるセミナーで受けた「大学生時代に何人の女性の先生から単位をもらいましたか？」という問いに私は愕然とした。ゼロであったからである。周囲も0～1人という方がほとんどであった。私自身もいわゆる男性視点の教育しか受けていなかったことに今更ながら気付かされた。全く私の反省も込めてであるが，私達のような上位職が，原著論文や症例報告，レビューなどを「無意識に」女性医師より男性医師に奨めている傾向はないだろうか？「育児中で忙しいだろうから」とか「時間内に業務を終わらせて早く帰宅しなくてはならないだろうから」などと気を使って，論文執筆や学術的な仕事を頼まなかったりしていないであろうか？または，意識に上らない程度に「周囲にそのような女性医師がいないから，女性は上位職を望んでいない」という考えを持っていないだろうか？また，女性医師自身にもアンコンシャスバイアスが無いと言えるであろうか？そうだとしたら「知」を活かしきれておらず，非常に残念なことである。

女性医師の皆様，もっと学術雑誌に投稿しませんか。可能であれば筆頭著者あるいは責任著者として。それにより自己を向上させるという事だけでなく，医学医療の発展に貢献することになります。そして本当の意味での平等が実現し，このような巻頭言を書かなくても済むような雑誌になることを大いに期待します。